島根県立看護短期大学紀要
第10巻，45－52，2004

在日外国人の育児の現状について（第１報）
―在日フィリピン人の母親の育児ストレスとその対処法―

濵村美和子・狩野　鈴子・三島みどり・永島　美香*

概　　要

在日外国人の育児の現状について明らかにすることを目的とし，在日フィリピン人の母親を対象に育児ストレスと対処法，育児で困っていること等を調査し，先行文献(清水，2002)との比較を行った。

結果，育児ストレス値は，日本人よりも低い傾向があった。平均値が最大で他の４か国よりストレス値が高い項目は，「同じ年頃の子どもの様子を知って我が子が劣っているのではないかと不安に思う」であった。また，「あきらめたり我慢する」ことでストレス対処を図っており，望ましいストレス対処のためには父親など関わりのある周囲の人々の支援の必要性が示唆された。

キーワード： 育児，ストレス，在日外国人，コーピング，フィリピン人

Ⅰ．緒　　言

平成12年の国勢調査「外国人に関する特別集計」によると，我が国に常住する外国人は131万１千人で，平成７年～12年の５年間に17万人(14.9%）増加し，外国人労働者，定住者いずれも増加している（総務省，2000)。

国際結婚による定住者の増加は，夫婦間の言語，宗教，生活習慣，風習や考え方など文化背景の違いから，ＤＶ（ドメスティックバイオレンス）や高い離婚率を引き起こしている。また，離婚後の子どもの養育や差別など育児に関わる新たな問題への介入が必要となりつつある（駒井，1995)(日本弁護士連合会編集委員会，1997)。

島根県では，平成10年～14年の５年間の国別の人口増減の内訳では，特にフィリピンが366人（52.8%）増で，全国平均に比して高い増加率であった。過疎化の進む島根県では，特に若者の都会地への人口流出などによる危機的な後継者の不足から，フィリピン人や中国人女性の定住者の増加が顕著である（島根県政策企画局，2003)。

本稿では，島根県在住の外国人の育児の現状として，急増する在日フィリピン人の母親を対象に，育児支援の基礎的調査として育児のストレスの現状とその対処法について調査した結果を報告する。

Ⅱ．研究方法

１．調査期間

平成16年７月～８月

２．調査対象

島根県に在住の在日外国人で，日本で出産し乳幼児をもつ母親39人を対象に無記名自記式質問紙でアンケート調査を行った。このうちフィリピン人の９人を分析の対象者とした。

３．調査方法

質問紙は，日本語で作成した質問紙を，中国語，韓国語，英語で翻訳後，それぞれを母語とするネイティブにより表現の確認を行った。

調査用紙の配布は，仲介者として地域で開業する助産師，日本語クラスの自助グループのリーダー，個人に調査概要の説明を行い，対象者への説明，配布の協力を得た。あるいは，仲介者の紹介によって対象者へ直接調査の概要説明と協力依頼，配布を行った。調査用紙は，中国語，韓国語，英語，日本語の中から対象者の母語ま

＊ 群馬大学大学院医学系研究科

たは母国語（公用語を含む）の質問紙を選択してもらい，回答は母語または母国語で得た。質問紙についての不明な点は，質問用紙に自由記載し，郵送で受け答えするように配慮した。対象者には，依頼用紙と質問紙を受け取った後，1か月以内に郵便にて返送してもらった。

4．調査内容

育児ストレスの内容と程度，ストレスの対処法，現在育児で困っていること，相談相手，母親の年齢，父親の年齢，子どもの人数と年齢，家族構成，職業の有無等を無記名による自記式質問紙によって調査した。

育児ストレスについては，清水氏の作成した(清水，2002)「育児ストレス40項目」を使用した（表1）。「育児ストレス40項目」の使用にあたっては，作成者の了承を得た。

ストレスの対処法の質問項目については，ラザルスとフォルクマンによる対処についての理論と，清水が調査で用いた質問項目を参照に「あきらめたり我慢する」，「日本人との交流をする」，「人の助けを得る」，「日本語の勉強をする」「他の事で気を紛らわす」，「気持ちや見方を変える」の6項目を質問内容として作成した。

5．分析方法

1）育児ストレスの分析

育児ストレスの尺度40項目は，全くあてはまらないを1点，ほとんどあてはまらないを2点，少しあてはまるを3点，あてはまるを4点と配点した4段階評定尺度とし，各項目の得点を，「育児ストレス値」とした。最低40点から最高160点であり，得点の合計が高い程，ストレスが大きい。検討方法は育児ストレス値の合計得点および各質問項目別の平均値を清水の先行研究と比較した（清水，2002)。今回は例数が少ないため検定はしていない。

2）ストレス対処法の分析

とてもそう思うを1点，少しそう思うを2点，あまり思わないを3点，全く思わないを4点を配点とした4段階評定法を用いた。最低6点から最高24点であり，得点の合計が高い程，その対処方法を使用していない。各ストレス対処の項目の平均値によって順位付けを行った。

6．倫理的配慮

対象者には，研究者（仲介者）が，書面によっ

表1　育児ストレス40項目（清水，2001より引用）

1	育児のことを考えると漠然とした不安を覚える。
2	子どもの性格に気がかりがある。
3	子どもにどう接していいかわからない。
4	子どもがあまり思い通りにならない。
5	育児について期待していたことと現実の間にギャップを感じてしまうことが多い。
6	子ども顔つきや容貌容姿に気がかりがある。
7	同じ年頃の子どもの様子を知って我が子が劣っているのではないかと不安に思う。
8	夫が子育てに協力的じゃない。
9	夫は子どもより自分の生活を中心に考えている。
10	夫が私の育児生活の苦労をわかってくれない。
11	夫の子育ては、不完全でかえって迷惑なことをする。
12	子育てしながらでは、就職できるところがなくて困っている。
13	いつか子育てに余裕ができる頃に就職できるかが不安だ。
14	子育てに専念しているために社会から取り残された気持ちになる。
15	周囲の人に子どもの母親としてしか診てもらえないのが、つらい。
16	育児のために睡眠不足の日々が続いている。
17	夜間育児のために何度も起きなくてはならなくて困っている。
18	育児で体の疲れがたまっている。
19	だだをこねられて困ってしまうことが多い。
20	子どもの機嫌が悪くなると困ってしまう。
21	暴れて動き回ったりいたずらされると困ってしまう
22	子育てから解放されて息抜きできる時間がすくなすぎる。
23	子どもの世話で他のやりたいことができない。
24	子どもの世話で自分の自由がきかないのがとてもつらい
25	子育ての毎日同じことの繰り返しに嫌気がさしてくる
26	完全な子育てをすべきだという周囲からのプレッシャーを感じる
27	子育てに関する昔ながらの地域や家の慣習を押しつけてくる。
28	祖父母の忠告によって子育てに対する迷いが生じることがある。
29	子どもの知的能力に気がかりがある。
30	子どもの言語能力に気がかりがある。
31	不可解な事件や犯罪に子どもが巻き込まれるか心配である。
32	就労している母親に対する社会や行政の配慮が足りない。
33	教育環境が不備なので、子どもの行く末に不安を持つ。
34	子どもに対して帰国後の不安がある。
35	日本の文化に適応できず子育てで困ることがある。
36	子どもと接する時間がなくてつらい
37	子どもが病気をしたときの対応に困る。
38	子どもに対する差別を感じつらいことがある
39	子育てと仕事の両立が大変だ
40	子育てしていても孤独感を感じることがある

て調査の目的，調査の趣旨および倫理的配慮を説明した。

調査への協力は自由意志であること，質問紙の回答や調査協力への中断によって何ら不利益を生じないこと，回収したデータは，数字で処理する事等，プライバシーの保護について保証し，質問紙の返送によって，協力の自由意志を尊重することを説明し協力をお願いした。

尚，本研究は島根県立看護短期大学の倫理審査委員会によって審査を受け，承認を得ている。

Ⅲ．結　　果

１．回収率

質問紙の配布数は全体で39人，回収は16人であった（回収率41.0%）。うちフィリピン人の母親への配布は25人で回収は９人（36.0%）で，このうち育児ストレス尺度の項目に記入漏れのない回答９人を有効回答（有効回答率100%）とし，分析の対象者とした。

質問紙の回収率の詳細は表２のとおりである。

表２　配布数と回収率

国　名	中　国	フィリピン	アメリカ	イラン	合　計
配布数(人)	12	25	1	1	39
回　収(人)	5	9	1	1	16
回収率(%)	41.7	36.0	100.0	100.0	41.0

２．属　性

対象者の母親は９人であり，平均年齢30.3（±4.9）歳，父親の年齢は平均年齢37.7（±15.3）歳であった。子どもを３人もつものは１人，２人もつものは２人，１人もつものは６人であった。職業の有無では，有職者が３人，無職者が５人，無回答が１人であった。父親の有職者が７人，無職者が１人，無回答が１人であった。家族の形態と人数の概要は表３のとおりである。

３．育児ストレス値

育児ストレス値の合計の平均値，項目別の平均値，４か国との比較結果について表４に示した。

育児ストレス値の合計の平均値は，77.8（±25.6）点であった。先行文献との比較では，日本人86.0（±12.0）点，中国人84.8（±21.5）点，韓国人85.6（±22.5）点で，３か国の母親よりもストレス値が低い傾向にあったが，ブラジル人70.6（±26.1）点より高い傾向にあった。

表３　対象者の属性

父親の年齢（±S.D.）（歳）			37.67(±15.33)
母親の年齢（±S.D.）（歳）			30.33(± 4.87)
子どもの数（人）		1人	1
		2人	2
		3人	6
職業(人)			
	父親	あり	7
		なし	1
		無回答	1
	母親	あり	3
		なし	5
		無回答	1
現在の家族(人)			
	形態	核家族	6
		複合家族	1
		無回答	2
	構成人数	3人	3
		4人	3
		5人	1
		6人	2
母国の家族(人)			
	形態	核家族	5
		複合家族	1
		無回答	3
	構成人数	3人	1
		4人	1
		5人	1
		6人	1
		7人	1
		9人	1
		10人	1
		11人	1
		無回答	1
	人数の平均(人)		6.9
兄弟姉妹の人数（本人含む）（人）			
	構成人数	2人	1
		3人	1
		4人	1
		7人	1
		8人	1
		10人	1
		無回答	3
	人数の平均(人)		5.7

ストレス値の平均が最大である項目は「7：同じ年頃の子どもの様子を知って我が子が劣っているのではないかと不安に思う」2.67点，であった。

各項目別に，日本人，中国人，韓国人，ブラジル人の母親よりストレス値の高い項目は，「7：同じ年頃の子どもの様子を知って我が子が劣っているのではないかと不安に思う」2.67点，「27：子育てに関する昔ながらの地域や家の慣習を押しつけてくる」，「13：いつか子育てに余

表4　育児ストレス項目と項目平均・4カ国との比較結果

※4カ国より高い＝H
4カ国より低い＝L

項目	質問内容	項目平均	順位	※4か国との比較
7)	同じ年頃の子どもの様子を知って我が子が劣っているのではないかと不安に思う。	2.67	1	H
19)	だだをこねられて困ってしまうことが多い。	2.44	2	
2)	子どもの性格に気がかりがある。	2.44	2	
38)	子どもに対する差別を感じつらいことがある	2.44	2	
20)	子どもの機嫌が悪くなると困ってしまう。	2.33	5	
31)	不可解な事件や犯罪に子どもが巻き込まれるか心配である。	2.33	5	
27)	子育てに関する昔ながらの地域や家の慣習を押しつけてくる。	2.33	5	H
13)	いつか子育てに余裕ができる頃に就職できるかが不安だ。	2.33	5	H
12)	子育てしながらでは、就職できるところがなくて困っている。	2.33	5	
8)	夫が子育てに協力的じゃない。	2.22	10	H
11)	夫の子育ては、不完全でかえって迷惑なことをする。	2.22	10	
30)	子どもの言語能力に気がかりがある。	2.22	10	
29)	子どもの知的能力に気がかりがある。	2.11	13	
17)	夜間育児のために何度も起きなくてはならなくて困っている。	2.11	13	
9)	夫は子どもより自分の生活を中心に考えている。	2	15	
23)	子どもの世話で他のやりたいことができない。	2	15	
14)	子育てに専念しているために社会から取り残された気持ちになる。	2	15	
6)	子ども顔つきや容貌容姿に気がかりがある。	2	15	
39)	子育てと仕事の両立が大変だ	2	15	L
35)	日本の文化に適応できず子育てで困ることがある。	2	15	
3)	子どもにどう接していいかわからない。	1.89	21	
25)	子育ての毎日同じことの繰り返しに嫌気がさしてくる	1.89	21	
1)	育児のことを考えると漠然とした不安を覚える。	1.89	21	L
22)	子育てから解放されて息抜きできる時間がすくなすぎる。	1.89	21	L
4)	子どもがあまり思い通りにならない。	1.78	25	
15)	周囲の人に子どもの母親としてしか診てもらえないのが、つらい。	1.78	25	
32)	就労している母親に対する社会や行政の配慮が足りない。	1.78	25	L
37)	子どもが病気をしたときの対応に困る。	1.78	25	L
21)	暴れて動き回ったりいたずらされると困ってしまう	1.67	29	L
10)	夫が私の育児生活の苦労をわかってくれない。	1.67	29	
33)	教育環境が不備なので、子どもの行く末に不安を持つ。	1.67	29	L
28)	祖父母の忠告によって子育てに対する迷いが生じることがある。	1.67	29	
18)	育児で体の疲れがたまっている。	1.56	33	L
40)	子育てしていても孤独感を感じることがある	1.56	33	L
36)	子どもと接する時間がなくてつらい	1.56	33	L
34)	子どもに対して帰国後の不安がある。	1.56	33	L
5)	育児について期待していたことと現実の間にギャップを感じてしまうことが多い。	1.44	37	
26)	完全な子育てをすべきだという周囲からのプレッシャーを感じる	1.44	37	
16)	育児のために睡眠不足の日々が続いている。	1.44	37	L
24)	子どもの世話で自分の自由がきかないのがとてもつらい	1.3	40	L
	育児ストレス値の合計の平均値±s.d.	77.8±25.6		

裕ができる頃に就職できるかが不安だ」がいずれも2.33点，「8： 父親が子育てに協力的ではない」2.22点であった。

ストレス値の平均が最小である項目は「24：子どもの世話で自分の自由がきかないのがとてもつらい」1.33点であった。

各項目別に，日本人，中国人，韓国人，ブラジル人の母親よりストレス値の低い項目は，「24： 子どもの世話で自分の自由がきかないのがつらい」1.33点，「16： 育児のために睡眠不足の日々が続いている」1.44点，「34： 子どもに対して帰国後の不安がある」，「36： 子どもと接する時間がなくてつらい」，「40： 子育てしていても孤独感を感じる事がある」，「18：育児で体の疲れがたまっている」がいずれも1.56点で，「33： 教育環境が不備なので子どもの行く末に不安をもつ」，「21： 暴れて動き回ったりいたずらされると困ってしまう」が1.67点，

「37：子どもが病気をしたときの対応に困る」，「32：就労している母親に対する社会や行政の配慮が足りない」が1.78点，「22：子育てから解放されて息抜きできる時間が少なすぎる」，「1：育児のことを考えると漠然とした不安を覚える」が1.89点，「39：子育てと仕事の両立が大変だ」2.0点であった。

4．育児で困っていることと相談相手

育児で困っていることについては，「日本語での意志疎通ができない」が5人，「習慣・文化の違い」，「相談相手がいない」，「父親とも意志疎通ができない」がいずれも2人であった。

育児で困った時の相談相手は，実母5人，友人3人，父親2人であった。

5．ストレスの対処法

ストレスの対処法については，「あきらめたり我慢する」2.11点，「日本人との交流をする」2.44点，「人の助けを得る」2.56点の順で使用していた。

最も使用していない対処法は「気持ちや見方を変える」3.44点で，次に「他の事で気を紛らわす」3.22点，「日本語の勉強をする」3.0点の順であった。

Ⅲ．考　　察

フィリピンは，母国語（公用語）をピリピノ語（タガログ語）と定め，1974年に二言語教育法が成立し小学校から英語（共通語）とピリピノ語（タガログ語）で授業するように整備された。しかし，100語以上も種類のあると言われる地方語を母語としている人が多く，二言語教育法は，地方語を母語とする子どもにとっては負担と言われている(三好，1982)。今回実際に出身の島の名前を記入した人もあり，地方出身で地方語を使っていた人もあると思われた。また，学校の卒業率は小学校で68%，中学校では50%と極めて悪く，その理由は，生徒の家族の経済的な理由によるものがほとんどで，教育達成度は低い。(Maria Rosario Piquero Ballescas, 1992)協力しなかった人の中には，英語は話せるが，質問紙の読み書きが充分にはできないという状況があるのではないかと推測され，回答率に多少なりとも影響があったと思われる。

育児ストレス値の平均が最大で4か国より高かった項目の「同じ年頃の子どもの様子を知って我が子が劣っているのではないかと不安に思う」は，清水によると，「育児に対する不安感」を育児ストレス因子とする質問項目であり，母親が育児に対して不得手に思っていることや，あるいは育児に伴う母親自身が感じる不安，心配事が示されているとしている（清水，2001)。

比較した先行文献の対象者は，日本人，ブラジル人，韓国人，中国人，いずれも同じ国籍の夫婦またはパートナーをもつ人（84.7～47.1%）が多かった。今回調査の対象者である母親はすべてフィリピン人で，父親は日本人であり，夫婦間の言語や文化の差による子育てに対する意識や考え方は異なっていると思われる。その違いについて夫婦間で充分に相互理解できる言語能力は共に乏しく，また，母親にとっては，家庭で行われる基本的な教育やしつけが，日本語で充分にできないことや文化や習慣に則して行えないことから，「同じ年頃の子どもの様子を知って我が子が劣っているのではないかと不安に思う」という思いに至り易いと思われた。このことは，子どもの心と体のすこやかな成長を願う母親の姿を示していると思われ，人並みに育ってほしいという親なら誰でも望む希望があると思われた。

清水の調査では，人種や言語，風習の違い等の文化の差については，分析されていなかったため要因として指摘されていなかったが，人種，言語，慣習の差がある夫婦には，この違いが育児ストレスの要因として存在しているのではないかと思われた。

育児ストレス値の平均が最小で4か国より低かった項目の「子どもの世話で自分の自由がきかないのがつらい」は，清水によれば，育児をしていて感じる母親自身の拘束感に関するもので自分の時間がなくなる，したいことができない等の「育児に伴う束縛感」を育児ストレス因子とする質問項目であるとしている（清水，2001)。

フィリピンには中産階級が極めて少なく，一部の特権階級が国の総生産の6%あまりの財産を持っており,他は低所得層が大多数である。特にフィリピンの大家族は貧困層と重なり，経

済的に就学児童に頼らざるを得ない。大家族であるため，就労児童でなくても家庭内の仕事の「弟妹の世話，皿洗い，洗濯，水くみ，ゴミ捨て，買い物など」等の家事労働は性差の区別なく年齢や兄弟の順番によって割り当てられており,家族のために働く時間を幼少の頃から習慣的に持っている（Maria Rosario Piquero Ballescas，1992)。この調査でも，『母国での家族』は，核家族でありながら平均6.9人，兄弟姉妹の平均人数は5.7人であった。小さい頃からの兄弟の世話や家事を行うなどの労働体験から，育児による制約や束縛感を感じないで子育てをすることができるのではないかと思われ，対象が育ち過してきた環境と経験と育児ストレスとの関連性について検討が必要であると思われた。

対処法については，ラザルスによると，ストレスへの対処は，２つの対処ストラテジー（考え方）として，「問題中心の対処（考え方)」，「情動中心の対処（考え方)」を持つとしている（ラザルス，1998)。

フィリピン人の母親によく使用されていた「あきらめたり我慢する」は，情動中心の対処（考え方）であり，心理的なストレスの緩和をしようとする対処法である。また，「日本人との交流をする」，「人の助けを得る」は，「問題中心の対処（考え方)」であり，ストレスの原因を積極的に解決しようとする対処法である。ラザルスによれば，両方の対処法（考え方）をバランス良く使い，対処できることが大切としている（ラザルス，1998)。つまり，「日本人との交流をする」，「人の助けを得る」という行動を増やし，「あきらめたり我慢する」ことを減らしていくことで，偏らないストレスへの対処ができると思われた。

「日本人との交流をする」，「人の助けを得る」とは，関わりのある周囲の人々とのコミュニケーションが十分に図られていくことであり，育児の中心的な支援者として父親や家族からのサポートが受けられることといえる。特に父親の存在と関わりが重要であると考えられる。父親を含む関わりのある周囲の人々に育児や日常生活について，言語的問題を乗り越え相談ができ，アドバイスや手助けを受けるということが，母親の育児ストレス対処のための有効な方法であると考えられた。

Ⅳ. ま と め

1．在日フィリピン人の母親は，中国人，韓国人，日本人の母親よりも育児ストレス値が低く，ブラジル人よりも高かった。
2．ストレス値の平均が最大で，４か国よりストレス値が高い項目は，「同じ年頃の子どもの様子を知って我が子が劣っているのではないかと不安に思う」であった。
3．ストレス値の平均が最小で４か国よりストレス値が低い項目は，「子どもの世話で自分の自由がきかないのがつらい」であった。
4．対処法は「あきらめたり我慢する」「日本人との交流をする」，「人の助けを得る」を使っていた。
5．父親など，関わりのある周囲の人々の支援が母親への育児ストレスの良い対処法であると考えられた。

おわりに

今回の調査では，タガログ語を専門的に翻訳できる人がみつからなかったことやフィリピンでは英語が学校教育で用いられていることから英語の質問用紙を配布した。しかし，対象の偏りを防ぐためには，ピリピノ語（タガログ語）と英語の併記にあわせて，地方語を母語とする地方出身者や学校教育を充分に受けていない人々についてはデータの収集方法の変更や工夫が必要と思われた。現在の生活状況のみでなく，育った出身国の社会的背景の違いによって，育児ストレスの認知内容が異なるということを，今後の検討の課題としたい。

文　　献

駒井洋監修（1995)，定住化する外国人，84-88，明石書店，東京.
Maria Rosario Piquero Ballescas（1992）世界人権問題草書1アジアの子どもの社会学フィリピンの子どもたちはなぜ働くのか，88,

明石書店，東京.

Maria Rosario Piquero Ballescas（1992）世界人権問題草書１アジアの子どもの社会学フィリピンの子どもたちはなぜ働くのか，170-171 ，明石書店，東京.

三好亜矢子（1982）：フィリピンレポート，58-63，女子パウロ会，東京.

日本弁護士連合会編集委員会（1997）：定住化時代の外国人の人権，63-66，明石書店，東京.

リチャード・S・ラザルス，スーザン・フォルクマン（1991）：Stress, Appraisal and coping, Spriger Publishing Company, New York.／本明寛，春木豊，織田正美監訳（1998）：ストレスの心理学，332-340，実務教育出版，東京.

島根県政策企画局統計調査課編（2003）：平成13年島根県統計書，55，高浜出版,島根.

清水嘉子（2003）：育児ストレスの実態研究ーストレス情動反応を中心にしてー，母性衛生，第44巻４号，372-378.

清水嘉子（2002）：在日韓国・中国・ブラジル人の母親の育児ストレスー日本の母親との比較からー，母性衛生，第43巻４号，530-540.

清水嘉子（2001）：育児環境の認知に焦点をあてた育児ストレス尺度の妥当性に関する研究，ストレス科学，第16巻３号，176-186.

清水嘉子，西田公昭（2000）：育児ストレスの構造，日本看護研究学会雑誌，第23巻５号，55-67.

総務省統計局（2000）：平成12年国勢調査第１次基本集計結果第37表国籍（10区分），男女別外国人数，2004-08-25，http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2000/kihon1/00/hyodai.htm

The Current State of Childcare among Foreign Residents (The 1st report): Childcare and Cultural Stress for Philippine Mothers

Miwako HAMAMURA, Reiko KANO, Midori MISHIMA
and Mika NAGASHIMA*

Abstract

Our aim was to investigate the current status of childcare among Philippine women living in Japan with special attention to stress associated with child care as well as cultural stress; we found that Philippine women tended to have lower stress scores than Japanese women. Among separated stress areas for Philippine women, when I learn about children of the same age as my child, I worry that my child may be inferior, scored high. They showed a tendency toward stress from coping with mothers' requiring patience and endurance. We suggest support for these women primarily in surrounding people which we consider essential in Childcare.

Key Words and Phrases: childcare, stress, foreign national residents, coping, Philippine

* Gunma University, graduate school of medicine